

認知機能低下高齢者の散歩行動を促す空間特性 と景観デザインの可能性に関する基礎的考察

柴田 久¹・池田隆太郎²・坂本健介³・渡辺孝司⁴

¹正会員 博(工) 福岡大学工学部社会デザイン工学科 (〒814-0180 福岡市城南区七隈八丁目 19-1)

E-mail: hisashi@fukuoka-u.ac.jp

²正会員 修(工) 福岡大学工学部社会デザイン工学科 (〒814-0180 福岡市城南区七隈八丁目 19-1)

E-mail: rikeda@fukuoka-u.ac.jp

³正会員 学(工) 日本工営都市空間株式会社 (〒461-0005 名古屋市東区東桜二丁目 17-14)

E-mail: b0496@n-koei.co.jp

⁴学生会員 学(工) 福岡大学大学院建設工学専攻 (〒814-0180 福岡市城南区七隈八丁目 19-1)

E-mail: td214017@cis.fukuoka-u.ac.jp

2025年には65歳以上の認知症患者数が約700万人に達するとされ、介護者への負担軽減を目指し、認知機能低下高齢者ができるかぎり自立した生活を続けられるよう、安全かつ健康的な外出を促す地域づくりの重要性が挙げられる。本研究では、福岡市にある「宅老所よりあい」「第2よりあい」の施設管理者、介助員、施設を利用する認知症高齢者を対象にヒアリング・観察調査を実施し、認知機能低下高齢者の散歩行動を促す屋外の空間特性ならびにこれに基づく今後の景観デザインの可能性等について考察した。その結果、①散歩行動を促す空間特性と保全整備のあり方、②包摂的なサポート・コミュニティ形成の重要性、③超高齢社会における景観デザインの可能性と課題を明らかにした。

Key Words: 認知機能低下高齢者, 外出行動, 散歩, 屋外環境, 宅老所, 介助員

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

厚生労働省の認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)によると、2025年には認知症高齢者の数が約700万人に達し、65歳以上の約5人に1人が該当するものと予想されている¹⁾。これに対し、必要となる介護・介助者自体の人員不足や負担の大きさが社会的課題となっている。土木のデザイン分野においても、認知症高齢者ができるかぎり自立した生活を続けられるよう、安全かつ健康的な外出を促す地域づくりの重要性が挙げられる。

本研究では、福岡市にある「宅老所よりあい」「第2よりあい」の施設管理者、介助員、施設を利用する認知症高齢者を対象にヒアリング・観察調査を実施し、認知機能低下高齢者の散歩行動を促す屋外の空間特性ならびにこれに基づく今後の景観デザインの可能性等について考察する。

(2) 既存研究および本研究の位置づけ

高齢者の外出行動に着目した研究はこれまでも多く見受けられる²⁾。近年では松村らが郊外計画住宅地を対象に、街路を中心とする徒歩外出環境の実態と高齢者の行動把握から、外出を後押しする要素について論じている³⁾。これに対し、認知機能低下高齢者の外出行動を対象とする既存研究として、絹川らは外出行動の施設居住認知症高齢者の精神面に与える好影響を把握している⁴⁾。さらに池尾らはデイサービスセンターを対象に、軽い認知症や身体障害等、介助を必要とする高齢者の外出行動の実態と外出支援の全体像および課題を明らかにしている⁵⁾。これに対し本研究では、認知症高齢者の外出および散歩を促す屋外の空間特性を把握し、超高齢社会の到来に向けた景観デザインの可能性と課題について論じる点で新規性を有す。

(3) 調査概要

本研究では後述する「宅老所よりあい」「第2宅老所よりあい」(以下、「よりあい」「第2よりあい」)にお

いて、施設を利用する認知症高齢者(以下、利用者)および介助員を対象に以下のような調査を行った。まず①両施設に勤務する介助員合計8名に対し、車を用いるなどした遠方を含む利用者の外出行動全般に関してヒアリング調査を行った(調査期間は2021年11月3日～8日)。次に②それぞれの施設管理者2名に対するヒアリング調査から、施設の利用状況および周辺で利用者が日常的に行っている散歩のルートを把握した。さらにその結果をもとに③ルートになりやすい歩道の傾斜や周辺に立地している建物など、現地踏査による散歩ルートの物理的条件のデータ収集を行った。また④それらのルートにおいて利用者の散歩に同行経験のある介助員5名と現在も散歩をしている質疑応答の可能な1名の利用者に対し、散歩行動に関わる意見を聴取した(調査日は2022年12月6日(火)、7日(水)の計2日間)。同時に⑤同ルートにおける利用者3名の散歩に介助員とともに筆者らも同行し、利用者の散歩行動の直接的な観察調査を実施した。

2. 宅老所よりあい利用者の外出行動の実態

(1) 対象施設の概要

宅老所よりあいは、福岡市中央区地行にある「よりあい」、南区桧原の「第2よりあい」、城南区別府の「よりあいの森」の3カ所にて運営されている⁹⁾。本施設は1991年、一人暮らしで認知症を抱えたお年寄りの居場所づくりを目的とし、福岡の伝照寺にて開所したことで知られ、現在の宅老所(介護の必要な高齢者に対して日帰りや短期宿泊のサービスを提供する小規模施設)の走りと言われている。宅老所の多くは民家等を改修した建物を使用し、家庭的な雰囲気の中でサービスが提供される⁷⁾。また利用する高齢者が出来る限り住み慣れた地域で生活できるよう、独自の福祉サービスを提供する地域密着型施設といわれている。よりあいは、利用者の外出行動を基本的に制限せず、利用者一人ひとりの気持ちを尊重し、小規模施設だからこそできる臨機応変なサービス提供を理念に、献身的な介護活動が行われている。

(2) 介助員への外出行動全般に関するヒアリング結果

前述した介助員への外出行動全般に関するヒアリング調査の結果を述べる。ここでは高齢者の外出場所にどのような傾向があるかを把握するため、利用者とともに介助員がこれまでに訪れたことのある外出先、さらに介助員が外出先を選ぶ上でのポイントを10項目提示し、その他を含む、複数選択可でその重要度について聴取した。さらに外出時のメンバー状況(利用者と介助員の人数等)について質問し、場所による人数の変化や介助員1人あたりの利用者対応人数などを把握した。さらに外出先で

のトイレ利用や外出時に使用した駐車場の詳細について、気になる点や改善点等の意見を伺った。最後に外出先だけでなく日常での屋外空間に関するエピソードを自由回答形式でヒアリングした(表-1)。

以下、結果について述べる(表内の数字は回答された件数で、文中括弧内の数字は合計件数に対する割合(%)を示す)。まず外出場所として得られたのは36カ所であった。これを外出目的ごとに分類した結果、「寺社訪問」が7カ所(19%)、「景色眺望」「菜の花・桜」「コスモス」がそれぞれ5カ所(13%)、「飲食」が4カ所(11%)、「故郷巡り」が3カ所(8%)、「買い物」「観賞」「休憩」がそれぞれ2カ所(6%)、「動物とのふれあい」が1カ所(3%)となった(表-2)。「寺社訪問」の理由として、飾りつけを見に行く(現人神社)、参道での食べ歩きなどを楽しむ(太宰府天満宮)等が挙げられた。また「景色眺望」「菜の花・桜」「コスモス」では「四季を感じることを目的としている」という理由が挙げられていた。気候的に過ごしやすい春と秋の外出場所が多く把握され、特にコロナ禍で人が集まる場所を避けるという点から、屋外で楽しめる場所が多く選ばれている傾向も看取された。

(3) 外出先選定時に重要視されるポイントと人数状況

提示した10項目から、複数回答可能で選択してもらった結果、「季節感を感じられるから」と回答した介助員が8人中6人(75%)、「駐車場が利用しやすいから」が5人(63%)、「利用者でも歩行しやすい道があるから」「複数回訪れたことがあるから」がそれぞれ4人(50%)より回答された。また「トイレが利用しやすい

表-1 ヒアリング質問項目

質問1	これまでに訪れたことがある外出先
質問2	外出先を選ぶ上でのポイント(複数回答可)
a. 季節感を感じられるから	f. 車椅子の方も連れていけるから
b. 買い物ができるから	g. 休憩場所があるから
c. 駐車場が利用しやすいから	h. 複数回訪れたことがあるから
d. トイレが利用しやすいから	i. 施設から近いから
e. お年寄りでも歩行しやすい道があるから	j. その他()
※選択した項目でそれが高齢者からの要望であったかも聞く	
質問3	外出時のメンバー状況(利用者と介助員の人数等)
*利用者の人数(人) *車椅子の方の有無(有・無)	
*介助員の人数について→運転手、車椅子の方や利用者を介助する人数など	
質問4	外出先でのトイレの利用について
*トイレの有無(有・無)	
・有の場合 トイレ利用に対する感想 例)利用者でも使いやすかったなど	
・無の場合 どこのトイレを利用したか 例)近くのコンビニなど	
質問5	外出時に使用した駐車場について
*駐車場の有無(有・無)	
・有の場合 駐車場についての感想	
例)車椅子マークがついた駐車スペースがあるなど	
・無の場合 目的地付近にあるどこの駐車場を利用したか	
※有無にかかわらず駐車場から目的地までの道のりの状況についても把握	
質問6	外出先だけでなく日常での屋外空間に対する自由回答
・どういふものがあるといいか、困ったこと、大変だったこと、いいと思った点、利用者の様子について など	

※質問2～5は質問1で挙げられた場所について質問した

表-2 外出場所とその目的

目的	箇所数	外出先（括弧内は人数）
寺社訪問	7	太宰府天満宮(3) 油山観音(2) 宗像大社(2)/鎮国寺 五社神社/現人神社 宮地嶽神社
景色眺望	5	油山展望台(2)/曲淵ダム 長谷ダム/鳴淵ダム/志賀島
菜の花、桜(春)	5	ゆらりんこ橋/西公園/堤団地 福ふくの里/桧原桜
コスモス(秋)	5	やよいの風公園(4) 周船寺駅前(4) 平原歴史公園(2) キリンビール工場/水城跡
飲食	4	抹茶カフェHACHI/伊都安蔵里 五ヶ山豆腐/二見ヶ浦カフェ
故郷巡り	3	直方炭鉱資料館 唐津駅前商店街 須恵町歴史民俗資料館
買い物	2	マリナタウン/伊都菜彩
観賞	2	石釜のギャラリー 平田ナーセリー
休憩	2	安徳公園/古屋敷南公園
動物とのふれあい	1	糸島やぎ牧場

表-3 外出先選定時に重要視されるポイント

項目	人数	買い物ができるから	
季節感を感じられるから	6	トイレが利用しやすいから	3
駐車場が利用しやすいから	5	休憩場所があるから	3
利用でも歩行しやすい道があるから	4	車椅子の方も連れていけるから	3
複数回訪れたことがあるから	4	施設から近いから	1
[その他] 介助員が個人的に訪れて利用者も楽しめそうだった/利用者からのリクエスト			

表-4 外出時におけるメンバー(利用者と介助員)の人数および状況

外出先	利用者(車椅子)	介助員	外出先	利用者(車椅子)	介助員
太宰府	5(2)	3	周船寺駅前	5(2)	2
現人神社	5(2)	3	コスモス畑	6(3)	4
抹茶カフェHACHI	5(2)	3		3~4(0)	1
マリナタウン	5(2)	3	指定なし	1~2(0)	1
糸島やぎ牧場	5(1)	3		3~4(0)	2
伊都安蔵里	3~4(0)	2		4~5(2)	2
やよいの風公園	5~6(3)	4	平均	4.8(1.5)	2.7
平原歴史公園	8~9(3)	5			
[その他意見]・車椅子利用者1人に職員が1人対応する ・利用者と外出先での移動距離によって車椅子を使用する ・人数が多い場合、全員がしっかりした方なら問題ないものの、例えばお手洗いに自分で行けない人、行ける人、行けるけど外に出ると混乱してしまつて分からなくなる人といった3パターンの方がいると、車から降りることが困難である					

から「休憩場所があるから」「車椅子の方も連れていけるから」もそれぞれ3人(38%)、「施設から近いから」は1人(13%)であった。さらにその他の項目から「介助員が個人的に訪れて利用者も楽しめそうだった」「利用者からのリクエスト」との意見も得られている(表-3)。

一方、外出時の平均人数は利用者約5人、その内、車椅子利用者が2人、これに対し介助員は約3人との結果が得られた(表-4)。また「車椅子の利用者1人に介助員1人が対応する」との回答から、介助員3人のうち2人が車椅子利用者2人に対応、残り1人の介助員が歩行可能な利用者3人を見る体制であることが看取された。またその他意見より「利用者と外出先での移動距離によって車椅子を使用する」との意見も得られ、普段歩行可能な利用者でも車椅子を使用するケースが把握された。

(4) 外出先でのトイレ利用について

外出先でのトイレについては、外出先に付随したトイレを利用できる場所として9カ所確認された。また利用できる理由としては「優先トイレがあるから」で、外出先にトイレがない場合に使用しやすい「ドラッグストアのトイレと似ている造りだったから」といった設備に関する意見が得られた(表-5)。一方、トイレがあるにも関わらず利用できなかった場所が3カ所確認された。理由として「和式または仮設トイレであったから」という意見が挙げられ、これらのトイレは介助員が同行してい

表-5 外出先でのトイレの利用について

外出先にトイレがある場合
[利用できる場所](9カ所) やよいの風公園/太宰府天満宮/現人神社/抹茶カフェHACHI マリナタウン/糸島やぎ牧場/平原歴史公園/伊都菜彩/鳴淵ダム
[理由] ・優先トイレがあるから ・ドラッグストアのトイレと似ている造りだったから
[利用できなかった場所](3カ所) 長谷ダム/油山/周船寺駅前
[理由] ・和式または仮設トイレであったから
[その他意見] ・場所によっては造りが古く、狭いトイレだと車椅子が入りにくい ・トイレ内の手すりが横だけではなく前にもあると良い ・新しい公共のトイレは比較的設備が整っていると思う ・外出先にあったとしても道中のコンビニ等を利用することが多い
外出先にトイレがない場合
[利用場所](2カ所) コンビニ/ドラッグストア
[理由] ・利用者を含め介助員も使いやすい ・ドラッグストアはエントランス内にトイレがあるから、駐車場からも近く、人目が気にならないため良い ・ドラッグストアは利用者の介護度に関係なく使用できるため汎用性が高い
[その他意見] ・外出先のトイレが和式である場合や、近くにコンビニなどのトイレを借りられる施設がなければ、その外出先を再び利用しないと思う ・昔に比べて今のコンビニは当たり前介助員も一緒に入れるようなトイレが増えたため、出かけやすくなった ・ドラッグストアのなかでは、特にコスモスのトイレの造りが良く、十分な広さがあり介助員も使いやすい

ても利用者が使用できない状況といえる。一方、外出先にトイレがない場合の利用場所は、道中の「コンビニ」

と「ドラッグストア」の2カ所が挙げられている。理由として主には「利用者を含め介助員も使いやすい」といった意見が得られ、車移動の際、単に寄りやすいからというだけでなく、介助員、利用者ともに使用しやすい設備が選択されていることが伺えた。特にドラッグストアは「エントランス内にあるから駐車場からも近く、人目が気にならないため良い」「利用者の介護度に関係なく使用できるため汎用性が高い」との回答が得られた。

(5) 駐車場の利用実態と屋外空間全般に対する意見

外出時に使用する駐車場については、駐車場から目的地までのアプローチと車椅子マークの駐車場に関する意見が多く把握された(表-6)。アプローチでは「地面が砂利だと車椅子移動が大変」「駐車場から目的地まで離れていると困る」等の路面や距離に関する回答が得られている。また「車椅子マークの駐車場はあっても、すでに駐車されていることがある」等、車椅子マークのついた駐車場台数の少なさや一般車の駐車マナーに対する指摘も把握された(写真-1)。

次に屋外空間全般に対する自由意見として「歩行空間」「休憩場所」「景観」に関する意見が得られた(表-7)。歩行空間については「砂利道または幅が狭いと車椅子が通りづらい」「寺社の石系の舗装が歩きづらい」「傾斜や段差が気になる」等の路面や傾斜、段差についての意見が把握された。またそうした理由で目的地の選択や外出自体を諦めてしまうケースがあることも確認された。さらにこうした意見に付随し「介護が不慣れな一般の方にとっても整備がなされていることは重要」との考えも把握されている。休憩場所については「ベンチや椅子などが設置されているような場所があると良い」「景色がよいところに座る場所があったらいいと思う」「夏の暑い日はベンチがあっても日影がないと休めない」等、快適性を備えた休憩場所に対するニーズの高さが看取された(写真-2)。またその理由として「介助員からすると少しの距離でも、利用者にとっては足が疲れてしまう」「利用者が歩き疲れて転ばないように、一息つきながら移動している」との回答も得られた。

最後に景観については「平坦な印象を受ける場所には長居できない」「最近の家は外壁に圧迫感があるデザインが多い」といった意見が挙げられ、バリアフリー整備＝利用者が長時間リラックスできるという単純なことではなく、興味をひく景観の要素や雰囲気、魅力などの存在が利用者の外出を促す屋外空間として重要との見方が示された。

(6) 地域コミュニティによる共助への要望

その他、介助員が外出時に感じられる意見として「利用者が徘徊のような形で目的なく一人で外出する際は、

表-6 外出時に利用した駐車場について

利用した駐車場に関する意見
【アプローチ】 <ul style="list-style-type: none"> ・地面が砂利だと車椅子移動が大変 ・駐車場から目的地まで離れていると困る ・飲食店の場合は先に入口までのアプローチを確認する ・駐車場はトイレの利用しやすさとリンクしている
【車椅子マーク】 <ul style="list-style-type: none"> ・車椅子マークの駐車場がなく、一般の駐車場に停める際、左右に車がある場合は狭く乗り降りが大変 ・車椅子マークのついていない駐車場が少ない ・車椅子マークの駐車場があると助かる ・車椅子マークの駐車場はあっても、すでに駐車されていることもある ・病院に車椅子マークの駐車場があったが、玄関までのアプローチに屋根のあるところとないところがあり、雨の日には屋根の付いている方の駐車場から埋まっていた



写真-1 駐車場での様子

表-7 屋外空間全般に対する意見

屋外空間全般に対する意見
【歩行空間】 <ul style="list-style-type: none"> ・砂利道は車椅子が通りづらい。坂もないほうが良い ・街中に車椅子が通りやすい(介助員が並んで歩ける)幅の道がない ・大きな段差や階段がなければ問題ない ・歩道のない道路の端の傾斜や段差が気になる ・神社やお寺の石系の舗装が歩きづらい ・車が通る道で歩道がないと危ない ・入り組んでいる住宅地の曲がり角ではちょっとした段差が危ない ・杖をつく方が側溝の穴に杖を引っかけてしまうことがあるので危ない ・雨で濡れたグレーチングが滑りやすい ・目的地へのアプローチが難しい箇所がある場合は行くのを諦めることもある
【理由】 <ul style="list-style-type: none"> ・車椅子の乗り降りだけでなく乗る前と降りてから、また目的地までのアプローチが整っていると良い。介助員だけでなく、介護が不慣れな一般の方にとっても整備がなされていることは重要 ・整備が不十分であるから、外出することを諦めてしまう人がいるのではないかと(お年寄りだけではなくそのご家族も含め)。都心だと街中で外出しているお年寄りをあまり見ない気がする
【休憩場所】 <ul style="list-style-type: none"> ・ベンチや椅子などが設置されているような場所があると良い ・景色がよいところに座る場所があったらいいと思う ・駐車場から目的地までの距離がある場合はベンチなどを有する屋根付きの休憩場所があると良い ・夏の暑い日はベンチがあっても日影がないと休めない ・夏であれば休む時に日影があっても座れるところがあると良い
【理由】 <ul style="list-style-type: none"> ・介助員にとって少しの距離でも、利用者にとっては足が疲れてしまうため、少しでも座れると体力的に違うと思う。休憩しようと思って休憩するのではなく、利用者が歩き疲れて転ばないように、一息つきながら移動している
【景観】 <ul style="list-style-type: none"> ・平坦な印象がある場所には長居できない ・最近の住宅街の家は外壁に圧迫感があるデザインが多い
【理由】 <ul style="list-style-type: none"> ・安全安心なバリアフリーのデザインが施されているような空間では、動きやすかったり力を抜けるような所があるとは思いますが、長時間リラックスした状態で楽しめるとは言えない。時間が経てば経つほど利用者が落ち着かなくなり、その場を立ち去るのが早い気がする。一方で、整備された空間が不要というわけでもない ・少々危なさや汚さ、じめっとしている、よく分からないようなものがある方が空間的には長居できると思う ・風景がつまらない、または遮断されていると感じてしまう

職員が見守りながら後ろをついて歩き、必要に応じて介助する」「その際、利用者がバスや知らない方の車に乗ろうとすることもあり、介助員がそれを止めようと事情を説明すると、周囲の方はないがしろにせず対応・理解してくれる」といったエピソードが語られた(表-8)。さらに利用者は「地域の方が気にかけてくれたり、親切に対応してくれたらしてもらえたいことを認識できる」「理想を言えば同じような場面で利用者を地域で見守ってもらえたら、自分達(介助員)だけで抱え込まずに済むと思う」といった回答も得られた。また「閉じ込めないという利用者の自由も守りつつ、地域の中の場所として施設が根ざしていけたら」といった地域のあり方に関する意見も得られた。さらに「過去の記憶を思い出せる場所に行く」と、調子の良い時は話が盛り上がる」「利用者は記憶の中に生きている」といった見解が示され、「利用者の心が動いている(興味関心がある)時は介助員ともに楽しむことができ、良い一日を過ごせたと感じる」とのコメントも把握された。

3. 施設周辺の散歩行動の実態

(1) 宅老所周辺における散歩ルートの立地状況

前述したように「よりあい」「第2よりあい」それぞれの施設管理者2名に対するヒアリング調査から、施設の利用状況と利用者の散歩に関わる基礎データ(表-9)を把握した。その結果、年齢層は70代~100代と幅広く、中でも80代後半から90代の利用者が多いことが把握された。散歩については歩くペースに個人差があるため単独を基本とし、利用者が1人で外出すると危険なため、必ず介助員1人は同行することが確認された。

また施設管理者の回答から得られた、周辺で利用者が日常的に行っている散歩ルートを図-1、図-2に示す。これより、施設周辺の空間的特徴として「よりあい」「第2よりあい」とともに古くからの住宅街に立地し、平坦な道とともに土地に起伏から急勾配のある坂や屈曲した街路などが混在していることが看取された。また現地踏査の結果から、両施設の散歩ルートともアスファルトで舗装されている道路が大部分を占め、第2よりあいでは舗装が施されていない砂利道が一部存在した。また両施設とも車道と歩道が分離されている箇所とそうでない箇所が混在し、ルート上、歩道も防護柵も無い道では、自動車の通行にかなり注意を払う必要があることが散見された。さらに両施設とも散歩で行く場所として、公園や神社が挙げられた。



写真2 休憩の様子

表-8 介助員が外出時に感じられること

介助員が外出時に感じられること	
【地域に関して】	
<ul style="list-style-type: none"> ・利用者が徘徊のような形で目的なく一人で外出する際は、介助員が見守りながら後ろをついて歩き、必要に応じて介助するなどしている。その際、お年寄りがバスや知らない方の車に乗ろうとすることもあり、職員がそれを止めようと事情を説明すると、周囲の方はないがしろにせず対応・理解してくれる。利用者は地域の方が気にかけてくれたり、親切に対応してくれたらしてもらえたいことを認識できる ・理想で言えば利用者が一人で外出したとしても、その利用者を地域で見守ってもらえたら自分達(介助員)だけで抱え込まずに済むと思う。閉じ込めないという利用者の自由も守りつつ、地域の中の場所として施設が根ざしていけたらと思う。また安心安全ではなく、信頼できるようなまちづくり、コミュニティが必要 	
【利用者特性】	
<ul style="list-style-type: none"> ・利用者は少しぼけているけれど記憶の中に生きている。調子のいいときは過去の記憶を思い出せる場所に行くと言話が盛り上がることもある。一方、調子の悪い日に昔のことを思い出さうと行ってしまうと混乱する場合もある。また先に外出先を決めてしまうと失敗することもあるため、当日の利用者の体調や気分、状況、雰囲気などを見るようにしている ・介助員は利用者と一緒に行動していて、利用者の心が動いているかどうか分かる。心が動いている(興味関心がある)時は介助員ともに楽しむことができ、いい一日を過ごせたと感じる 	

表-9 施設管理者から得た利用者の散歩に関する基礎データ

よりあい	第2よりあい
利用者の人数	
17人	15人
年齢層	
75歳~100歳 (70代:2名, 90代以上がほとんど)	70歳~101歳 (80代後半~90代前半が大半)
歩ける方の人数	
4人	10人
利用者の散歩の有無	
あり	
散歩時の人数	
2人(利用者1人+介助員1人)	
散歩で行ったことがある場所	
伝照寺, 菰川公園, 唐人町商店街, 唐人町駅	五社神社, 小屋敷南公園, 小屋敷公園, 西花畑公民館, ひつじのおうちカフェ, コンビニ
散歩の目的	
イベントの参加, 花の鑑賞, 買い物, 気分転換	イベントの参加, 買い物, 気分転換
散歩のルート	
図-1, 図-2参照	

(2) 介助員・利用者へのヒアリングから得られた施設周辺における利用者散歩行動の特性

次に散歩ルートを利用者と同行した経験のある介助員5名と、実際に散歩し質疑応答の可能な利用者1名に対し、散歩中の利用者の行動や傾向についてヒアリングを行った。その結果、合計で利用者8名分(表-10)のルートおよび散歩中の行動の傾向が把握された。以下、ヒアリングより得られた回答内容を分類し、特徴を把握する。



図-1 よりあい散歩ルート



図-2 第2よりあい散歩ルート

表-10 よりあい、第2よりあい利用者8名の属性と散歩行動

		よりあい			第2よりあい				
		T.T	E.K	K.Y	N.M	H.M	Y.E	K.K	T.K
属性	氏名	T.T	E.K	K.Y	N.M	H.M	Y.E	K.K	T.K
	性別	女性	女性	女性	男性	女性	女性	女性	女性
	年齢	85歳	89歳	99歳	88歳	102歳	95歳	85歳	87歳
	介護度	要介護4	要介護1	要介護3	要介護2	要介護2	要介護4	要介護1	要介護2
歩行能力		—	—	車いす	杖	杖	職員と手つなぎ	—	—
散歩について	目的	習慣として	気分転換	商店街の和菓子屋に買い物	習慣として	気分転換	気分転換	セブンイレブンに買い物	家に帰るため
	頻度	1日に何度も	年に数回	年に数回(ドライブに連れていけない場合)	1日に何度も	ほぼ毎日	週に数回	年に数回	月に数回
	ルートの規則性	あり	あり	※職員がルート選択	あり	あり	なし	あり	あり
	散歩中の休憩の有無	なし	なし	なし	あり(場合により)	あり(場合により)	なし	なし	なし
	散歩中に興味を示すもの	選挙の立候補者ポスター、自動販売機	何にも興味を示さず、ただひたすら歩く	介助員が「花が綺麗ですね」等の声をかけることはあるが、見ているかは分からなかった	グラウンド(走る学生)、神社の入り口、森の中、赤い葉の木	グラウンド(走る学生)、神社の入り口、花壇の花、校庭の桜	知らない人の家、神社の入り口、森の中、小学生、赤ちゃん	—	—

※-：調査から得られず

a) 散歩行動に至る契機・理由について

散歩に出かける理由や外出するきっかけとして「散歩をすると今日も元気に過ぎたなあどとホッとする」「足を丈夫にするために歩いている」といった回答が得られ(表-11)、歩くこと自体を目的とし、散歩が習慣化されている様子が看取された。また「施設の中は他の利用者の話声が気になる」「新しい利用者は施設に混乱して、施設の中が落ち着かないから外に出る」など、気晴らしを目的として外に出るケースも見受けられた。さらに「外で何かを買って食べたい」「コンビニで買ったものを公園で食べる」といった「買い物」がきっかけとなる外出行動も看取されている。加えて「外が気になったから」という意見や「家の様子を見に行ってくる」「『家に帰らないかん』と言って出かける」など、関心事や帰宅等の目的で外出するも途中で忘れてしまい、結果的に散歩になるケースも把握された。

b) 散歩ルートの選択とその傾向

散歩ルートの選択について伺ったところ、規則的なルート選択がなされている様子が見受けられた(表-12)。

表-11 散歩や外出のきっかけ、理由に関する回答結果

散歩や外出のきっかけ、理由 (利用者からの意見・介助員からの意見)
<p>「習慣として」</p> <ul style="list-style-type: none"> なるべく介助員の手を借りず、自分一人で行動できるようにするために、歩いて足を丈夫にしたい 散歩が習慣になっていて、歩かないといけな思ってるかもしれない
<p>「気晴らし」</p> <ul style="list-style-type: none"> 気分転換 散歩すると今日も元気に過ぎたなあどとホッとする 私たちと同じように、じっとしてたら動きたくなるのだと思う 落ち着いたり、気分が変わるため外出する 気分転換に外で何か買って食べたいと言って、コンビニに行く人もいる おやつを買いに商店街へ行く 施設の中は、他の利用者の話声が気になる 新しい利用者は施設に混乱して、施設の中が落ち着かないから外に出る
<p>「家に帰るため」</p> <ul style="list-style-type: none"> 家の様子を見に行ってくると言って出かける 「主人のご飯の準備があるけん家に帰らないかん」と言って出て行かれるが途中で忘れてしまう
<p>「その他」</p> <ul style="list-style-type: none"> 外が気になり、外に出ることしか考えられなくなる

「最初は道が分からないため、介助員と相談しながら歩いていくが、だんだん相談せずに一人で歩けるようになっていく」「昔は色々なルートを歩いていたが、介助員と一緒に歩く中で、今のルートが本人にとって一番よくなった」といった回答が得られ、利用者の散歩ルートが介助員とともに形成され、徐々に決まったルートを歩く傾向が抽出された。一方、利用者から、ルートを選ぶ理由として「自分の気分で自然と足が向かう方に歩く」「気分が良いときは坂を上る」「介助員の方がついてくるから、悪いと思って結局駐車場を歩くだけの時もある」等の意見が得られている。介助員からも「規則性がある人もたまに違うルートで歩く」といった回答もあり、利用者が決まったルートだけでなく、その時の気分や介助員との関係によって散歩ルートを偶発的に変更するケースも看取された。その他「休憩場所ができる、ルートの選択肢が増えるため、利用者の散歩の楽しみの幅も広がる」、「特に若い介助員は毎日何度も同じルートを歩いているとどうしても退屈してしまう」といった意見も得られている。

c) 介助員の同伴と地域のあり方について

その他、散歩中の様子に関する自由回答として、介助員から「施設が見えても帰り道が分からなくなることがあった」「いつもと違うルートだと施設を通りすぎてしまう」等の回答が得られた(表-13)。さらに「理想を言えば一人で歩かせられたらいいなと思うが、施設としてもその間に何か起きたらということ考えると難しいものがある」といった意見が得られ、利用者が散歩に出る際には、介助員が同伴せざるを得ないとの見解が把握された。一方で、利用者から「介助員の方がついてこられると、気を遣って自分のペースで歩けない」との回答が得られている。介助員からも「軽度の認知症の人は介助員が付いてくることに対して、私が帰れないって思ってるの？とすごく嫌がる」との回答や、利用者からの「介助員がいると気を遣ってしまい、どうしても歩くスピードが速くなる」「ひとりだと自分のペースで歩けるから、そんなに疲れる事もない」といった、介助員の同伴に関する否定的な意見が看取された。加えて「私達と一緒に利用者が歩く姿を見かけてもらう中で細かな変化に気づいてもらう時もあり、もし万一、一人で出て行ってしまっても、見守ってもらえたり、施設に知らせてもらえる」といった意見が得られた(表-14)。「地域の中で横のつながりができたり、いろんなことが助け合いながら完結していくというのが形成できればいいと思う」など、地域に対する介助員の見解が把握された。

表-12 散歩ルートの選択に関する回答結果

散歩ルートの選択について (利用者からの意見・介助員からの意見)
<p>「ルートの規則性」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歩くルートが決まっている ・歩くルートは決まってない ・当初、歩くルートは決まっていなかった ・最初は規則性はなかったが、だんだん今のルートが中心になってきた ・ルートに規則性がある人もたまに違うルートで歩くことがある
<p>「ルート形成について」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初の頃は、介助員に「こっち行って良い?」「こっち行ける?」と聞きながら、色々歩いていたが、今はコースが決まってきた ・最初は道が分からないため、介助員と相談しながら歩いていたが、だんだん相談せずに一人で歩けるようになっていく ・昔は色々なルートを歩いていたが、介助員と一緒に歩く中で、今のルートが本人にとって一番よくなった ・何度も一緒に歩くことによって、歩く傾向が分かり、見失ったり、いなくなったりしたときは発見しやすくなる しかし、その予測が当たらず、全然見つからないことも多々ある
<p>「ルート選択について」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何も考えないで、自分の気分で自然と足が向かう方に歩く 気分が良い時は坂を上る ・外に出ると介助員の方がついてくるから、悪いと思って結局、施設の隣の駐車場をぐるぐる歩くだけのときもある ・近くの公園には休憩ところがあるが、そこに行くまでにちょっと坂道があるが、その坂は勾配が激しいからなかなか公園側には行かない ・子供達の登下校時間など人が多い時間帯は避ける ・道が来たから左に曲がって、また道が来たら左に曲がるをずっと繰り返しているだけかもしれない ・認知症の人は決まった道、決まった場所は安心するけど、少しでも違ったら不安になるため、知ってる道を歩いた方がいいかもしれない ・休憩場所ができる、ルートの選択肢が増えるため、利用者の散歩の楽しみの幅も広がる ・特に若い介助員は毎日何度も同じルートを歩いているとどうしても退屈してしまう

表-13 散歩中の様子に関する自由回答結果

散歩中の様子について (利用者からの意見・介助員からの意見)
<p>「歩くときの傾向」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なるべく転ばないように注意して、歩くことだけに無我夢中 ・車が後ろから来ても気づかないときがある ・外が気になると外出のことしか考えられず、足元の置物にぶつかる ・「そこに行きたい」と思うと、静止がきかない ・坂道などでは特に、転ばないように足元に注意を向けている人が多い ・注意が向かない人は行きたい方向にどんどん進んでいき、道なき道を行こうとする
<p>「興味・関心を示すもの」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・知らない人の家に入っていこうとすることがある ・下校中の小学生に関心を向け、話しかけることもある ・何も見ずにただひたすら歩いている ・同じコースを毎日歩くと、特に若い職員は退屈するが、利用者は私たちが目にして何とも思わないことにすごく感謝するため、毎回楽しんでる
<p>「職員と一緒に歩くことについて」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・介助員の方がついてこられると、気を遣って自分のペースで歩けない ひとりだと自分のペースで歩けるから、そんなに疲れる事もなく、ひとりだと歩く方が楽。そのため介助員の方に黙って出かける ・介助員に気を遣ってしまい、どうしても歩くスピードが速くなる 自分のペースで歩くことと転ぶようなことはあまりない ・同じ人でも、ついてこないでほしい時とついてくることに感謝される時がある 理想を言えば、一人で歩かせられたらいいなと思うが、施設としてもその間に何か起きたらということ考えると難しいものがある ・軽度の認知症の人は介助員が付いてくることに対して、私が帰れないって思ってるの？とすごく嫌がる。私たちが帰ってこれるとは思っているが、もしものときのためにについていく
<p>「認知症の記憶」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・施設が見えても帰り道が分からなくなることがあった ・頭の中の景色とその景色が合っていれば迷わない ・利用者は習慣の中で生きていってらっしゃるので、体が覚えている ・いつもと違うルートだと施設を通り過ぎてしまう

表-14 地域に対する介助員の意見

地域に対する介助者の意見
<ul style="list-style-type: none"> ・私たちと一緒に利用者が歩く姿を見かけてもらう中で細かな変化に気づいてもらう時もあり、もし万が一、一人で出て行ってしまうことがあっても、見守ってもらえたり、施設に知らせてもらえる ・利用者を見て、どこの誰か、ということはある程度地域で共有できていることは良い事だと思う ・地域の中で認知症のお年寄りがいて、その息子さん、娘さんがいて、孫が小学校通っている環境であれば、お年寄りがどこの誰なのかがみんな分かり、理想である。地域の中で横のつながりができたり、いろんなことが助け合いながら完結していくというのが形成できればいい ・普段と違う何かを目にしたときに、怪訝なまなざしではなく、何が起きてるんだらう、と見る時間を社会の側が備えれば、私たちもお年寄りたちも生きやすい

4. 観察調査から得られた散歩ルート of 空間的状況と散歩行動との関連性

(1) 観察調査の概要

本研究では、上記ヒアリング調査と並行し、第2よりあいの利用者3名(表-15)の散歩に対する観察調査を実施した(調査日は介助員へのヒアリング調査と同じく令和4年12月6日(火)、7日(水)の計2日間であり、両日ともに施設の営業時間である10:00~17:00の計14時間で実施)。ここでは利用者3名の施設を出てから帰るまでの散歩に複数回同行し、ルートおよび散歩中の行動を実見した。なお散歩の様子は後方からGoProで動画撮影し、その動画をもとに、立ち止まった場所や時間、観察された行動や様子を地図上に記録した。

(2) 散歩ルートの空間的状況と散歩行動との関連性

第2よりあい周辺の現地踏査から得られた空間的状況(歩道や防護柵の有無、勾配^{注1)}等)と散歩中の利用者の行動ならびに前述した介助員・利用者へのヒアリング結果(一部)を重ね合わせた布置図を図-3に示す。これより、まず利用者全員に共通して見られた行動として、横断防止柵やフェンスを手すり代わりに利用する様子が確認された(写真-3)。なかには柵を掴み損ね、転倒する利用者の様子も把握された。介助員からも利用者が散歩する環境について「ちょっとした段差でもつまずくので掴まるところがある」「坂道には手摺があるといい」といった意見が得られている(表-16)。また利用者からも「つかむところがあれば嬉しい」「転ばないように気をつかう」と回答され、転倒に対して強い警戒心を抱いていることが伺えた。観察調査からも散歩中の視線は下向きであることが多く、車や通行人に気づかず、車が通りすぎるまで介助員が利用者を制止する様子も確認された。一方、認知症の症状が重く、要介護度4の利用者は、進みたい方向だけを見て歩くため、足元の段差に何度もつまずく様子が確認されている。「注意が向かない利用者は、自分が行きたい方向にどんどん進んでいく」

表-15 観察調査対象者の概要

		観察調査対象者			
		N.M	H.M	Y.E	
基本属性	氏名				
	性別	男性	女性	女性	
	年齢	88歳	102歳	95歳	
	介護度	要介護2	要介護2	要介護4	
	歩行能力	杖	杖	職員と手つなぎ	
観察時の散歩の概要	目的	習慣として	気分転換	気分転換	
	散歩中の休憩回数	0回	0回	1回	
	散歩中に興味を示したものの	グラウンド(走る学生)、神社の入り口、森の中	グラウンド(走る学生)、神社の入り口、花壇のお花	知らない人の家、神社の入り口、森の中、小学生、赤ちゃん	
	観察した散歩回数	4回	1回	1回	
	散歩時間	10:50~11:09(19分)			
		11:17~11:39(22分)			
13:53~14:23(30分)		13:30~13:56(26分)		10:38~12:05(1時間27分)	
15:00~15:21(21分)					



写真-3 ガードレールを掴みながら歩く様子

表-16 散歩する屋外環境に対する意見

屋外環境に関する意見(利用者からの意見・介助員からの意見)
<p>【休憩場所】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・休憩場所ができると、介助者がルートを提案でき、選択肢も増えるため、利用者にとって散歩の楽しみの幅も広がると思う ・木陰があったら嬉しい ・夏場はちょっとした休憩所があるとありがたい ・短い距離だと利用者が座っている様子は確認していない ・案内のようなものがあれば、自分で帰れるかもしれない
<p>【手すり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歩道の狭さはそこまで気にならない。つかむところがあれば嬉しい ・ちょっとした段差でもつまずくので掴まるところがある ・坂道には手摺があるといい
<p>【横断歩道】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・横断歩道は渡りにくいので、歩くときは転ばないように気をつかう ・赤信号で止めても進もうとして、もみ合いになることもあり、なるべく横断歩道を渡りたくない
<p>【空間的状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・住宅街の中だと、利用者を見失い、全然見つけられないときがある ・碁盤目状の住宅街は景色が似てるため、曲がる道間違えただけで、どこかわからなくなるかもしれない ・整備されてべたっとしたところよりは、第2よりあいのように古くから人が住んでる所の方が、歩いていて楽しいのではないかと

(表-13)「赤信号で止めても進もうとして、もみ合いになる」(表-16)との回答が得られ、観察調査においても同様に介助員から離れようと手を噛もうとする様子も見受けられた。さらに利用者が他人の家に何度も入る



図-3 第2よりあいにおける散歩ルートの空間的状況と散歩行動との関連性

うとする様子も同え、認知症によって注意力が下がり、意識が興味を示したものだけに向いてしまう行動が把握された。

一方、散歩中の興味は利用者によって様々であったが、ルート上の五社神社と中学校のグラウンドには利用者全員が興味を示し、五社神社東側の勾配 10%以上の坂道を通るルートを選んでいる様子が確認された。坂道を上った先は見晴らしの良い高台で、森に覆われた五社神社が見えるとともに、鳥の鳴き声や木々が揺れる音に包まれる場所であった。さらに神社を横目に、中学校のグラウンドが俯瞰景として眺められ、透過性の高いフェンスで囲まれていることから、グラウンド内で学生の運動している様子がよく見える状況も確認された。

また前述した散歩中の様子として「道なき道を行こうとする」等の回答(表-13)と同様に、観察調査でもルート選択の際に傾斜が無いなどの歩きやすさよりも、利用者が興味をひいたルートを選ぶ傾向が看取された。そのため、坂道では何度もよろける様子が確認されるとともに、「疲れたときはよく五社神社の石垣に座って休憩する」「その際、日陰もあり、風が抜けて気持ちがいい」「グラウンドで子ども達が運動している様子をしばらく見ている」等、利用者の好まれる休憩場所の状況が把握された。ここでは上記神社の石垣に加え、神社への階段

や公民館前の花壇がベンチ代わりに利用されている状況も見受けられた(図-3)。これに対し、ベンチを有する古屋敷南公園は、到着までのルート上、11%の勾配を持つ坂を下るの必要があり「坂が急だから公園側には行けない」といった利用者からの回答が得られた。その他、利用者が「坂の上からの景色を見て子供時代を思い出す」といった昔を懐古する様子や「赤くなっている木を見ていた」など、季節を感じる花木に興味を示す様子が確認されている。

5. 認知機能低下高齢者にやさしい屋外空間づくりと景観デザインの可能性

(1) 散歩行動を促す空間的特性と保全整備のあり方

以上の調査結果から、外出や散歩を促す空間特性として、緑に包まれた社寺や見晴らしの良い高台、季節の変化が感じられる花木の存在などが抽出された。特に昔の記憶を喚起させ、聴覚を含む五感を刺激し、人(特に子ども)の動きが眺められる空間は散歩行動を促すうえで有効といえる。また認知症高齢者の散歩ルートの選択には、休憩場所の有無とともに、急な下り坂を避け、平坦さよりも行き先が見え隠れする登り坂等、興味を抱かせ

る変化に富んだ道が好まれる傾向も把握された。すなわち、つまずきやすい段差を解消しながら、勾配等への一様なバリアフリー整備に終始しないこと、さらに地形の変化や上記空間特性を持つ場所の保全と休憩スペースの確保を図ることが、認知機能低下高齢者の散歩行動の促進と健康維持に貢献できる可能性が示唆される。

(2) 包摂的なサポート・コミュニティ形成の重要性

一方で、認知症の進行による自制力の低下から、介助員の同伴を拒む利用者の態度や散歩行動の様子が看取された。同時に注意力や歩行能力の低下した認知症高齢者に対する見守りの必要性が確認され、介助員からは地域コミュニティからの援助を望むヒアリング結果も得られた。すなわち、認知機能低下高齢者にやさしい屋外空間の形成にはハード整備だけでなく、見守りや声掛けなどが日常的に行われる包摂的なサポート・コミュニティの形成が重要と考えられる。冒頭で述べた介助員への負担増や人手不足の対策としても、地域住民による共助を引き出す空間づくりや具体的な仕組みの検討が急務といえよう。

(3) 超高齢社会における景観デザインの可能性と課題

前述したように、認知症高齢者の散歩行動において、道路付属物である車両用防護柵等が転倒を防ぐ手すりとして代用されている実態が明らかとなった。すなわち、薄い帯状のガードレールを手で掴みやすいガードパイプに取り替える設置工事などは、街路内の閉塞感の軽減や透過性の向上等、景観への配慮となるだけでなく、認知機能低下高齢者の散歩行動の安全性を高めることに寄与する可能性が挙げられる。また介護施設の周辺や超高齢化の進む地域において、前述した空間特性を持つ場所を、地域住民が訪れたいとする視点場として、同時に散歩する高齢者とふれ合える居場所として整備できるか、共助に繋がる景観デザインとして、今後の重要な課題となり得るのではないかと。

6. 本研究の成果と今後の課題

本研究では、福岡市にある「よりあい」「第2よりあ

い」の施設管理者、介助員、施設を利用する認知症高齢者を対象としたヒアリングおよび観察調査の結果から、認知機能低下高齢者の散歩行動を促す屋外の空間特性と今後に向けた景観デザインの可能性、課題について考察した。

本研究上の今後の課題として、被験者数や対象地の拡充による本調査結果の再検証、軽度認知障害をもつ高齢者への調査実施と結果の比較、サポート・コミュニティの形成に有効な屋外空間づくりに対する実践的検討が挙げられる。

謝辞：ヒアリングならびに観察調査にご協力いただいた宅老所よりあい、第2よりあいの施設管理者、介助員、利用者の皆様に対し、ここに記して謝意を表する。

付録

注1) 「移動等円滑化のために必要な道路の構造に関する基準」(平成18年国土交通省令第116号)において『歩道等の縦断勾配は5%以下、やむを得ない場合においては8%以下』とされている。本研究ではこれに基づき縦断勾配5%以上の街路のみを計測した。また測定地点は原則、歩道の中央とし、歩道がない場合は路側帯、車道の優先順とした。

参考文献

- 1) 厚生労働省：認知症施策推進総合戦略(改訂版)，p1, 2017
- 2) 例えば大森清博,柳原崇男,北川博巳,池田典弘：高齢者の視覚探索特性を考慮した路面誘導サインの有効性に関する考察，土木学会論文集 D3, 第72巻 第5号, pp.I-1105-I-1113, 2016など
- 3) 松村優,真鍋陸太郎,村山顕人：郊外計画住宅地における高齢者が外出しやすい市街地環境-松戸市小金原地域を対象に-, 日本都市計画論文集, 56巻 1号, pp.24-31, 2021
- 4) 絹川 麻里, 濱田 泰子, 三浦 研, 高田 光雄：外出行動が施設居住認知症高齢者の精神面に与える影響, 日本建築学会計画系論文集 70 (592), pp.17-24, 2005
- 5) 池尾 恵里, 後藤 春彦, 佐藤 宏亮：介助を必要とする高齢者の外出行動の実態と外出支援の課題, 都市計画論文集 49 (3), pp.825-830, 2014
- 6) 宅老所よりあい：よりあいの歩み, <http://yorainomori.com/sample-page/>, 2023年8月閲覧
- 7) 厚生労働省ホームページ(居宅系施設等との連携-総論3), <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000114467.pdf>, 2023年8月閲覧